沖縄アクターズスクールと Cocco

－ 90 年代後半の表象されるオキナワとその背景－

山入端　太　一

論文要旨

1995 年に発生した米兵少女暴行事件は、沖縄県民の反基地感情を高め、駐留米軍基地から生じる様々な問題に飛び火し、全国的関心をあつめるほどの政治的問題へと発展していった。同時代、「オキナワの少女」が商品化され、沖縄の社会問題から目を背けるための装置として機能した。それは沖縄アクターズスクールのイメージ戦略と、政治とが複雑に絡んでいたと言える。それに対して、Cocco はそうしたオキナワ・イメージから距離を置き、商品化されることを避けてきた。それが彼女の音楽表現の中に表れていると分析する。「オキナワの少女」を巡る表象の闘いは今なお続いているのである。

キーワード：沖縄アクターズスクール、Cocco、商品化、オキナワの少女

“Okinawa Actors School” and “Cocco”

－ Imaged Okinawa of the latter half of the 90’s and This background －

Abstract

three American soldiers raped a school girl in Okinawa in 1995. This rape case improved Okinawan’s anti-base feelings. And, it leapt to various problems of causing it from stationing U.S. bases’. It has developed into a political problem as nationwide concerns are collected. At the same time, “Girl of [okinawa] ” were commercialized, and there was a meaning to forget the social trouble with Okinawa. It is a strategy of the Okinawa actors school. It can be said that it twined round the complexity with politics. On the other hand,Cocco keep away from such Okinawan image. She was trying to avoid being commercialized. It is analyzed that it appears in her musical expression. The fight of the symbol over “Girl of [okinawa] ”continues still now.

Key word：Okinawa actors school, Cocco, Commercialization, Girl of [okinawa]

1. はじめに

2008年２月10日、沖縄県本島中部で女子中学生が米海兵隊員に暴行を加えられる事件が発生した。県民の脳裏には1995年の米兵少女暴行事件が連想された。1995年の米兵少女暴行事件では、反基地世論の高まりにつながり、米軍普天間飛行場の移設合意（＝SACO 合意）へと展開した。それから十数年の時を経たが、沖縄を取り巻く現状は変わらず、普天間基地も撤去へと至っていない。本稿を書いている2009年12月現在、政権交代とともに普天間基地の移設問題が、再び政治的関心を高めている。

1995年の米兵少女暴行事件を起点に、沖縄アクターズスクールと Cocco を通して、当時の沖縄社会が音楽表象に与えた影響について考察する。本稿は拙著の2007年度の修士論文「ウチナーンチュのエンパワーメントの確立―沖縄音楽社会史の変遷を通して―」の第４章「Cocco が登場した背景」に加筆・修正を加えることで、2009年現在の視点から再考してみようという試みである。さらには、同時代の沖縄の「少女の沈黙」の中にある幻の声を言語化していく試みでもある。

2. 米兵少女暴行事件と「少女の沈黙」

1995年９月４日、沖縄に駐留する米兵３人によって小学生の女の子が拉致され、強姦される事件が起きた。まもなく、事件が報道されると、日米地位協定の見直し論と結びつき、社会的関心を集める重大事件となった。同年の10月21日には宜野湾海浜公園で超党派での抗議集会「米軍人による少女暴行事件を糾弾し日米地位協定の見直しを要求する沖縄県民総決起大会」が開かれ、８万５千人が結集した。その前には米軍用地の強制使用を当時の沖縄県知事である大田昌秀が拒否して全国的関心を集めた。大田知事の軍用地接収のための代理署名拒否は、米兵少女暴行事件と別問題であったが、県民の基地不信とリンクする形で世論が盛り上がっていった。このように米兵少女暴行事件は駐留米軍基地から生じる様々な問題に飛び火し、沖縄のみならず、全国的関心を集めるほどの事件となったのである。しかし、一方でセカンドレイプのような報道合戦となり、一人の少女を巻き込んだ事件が政治的問題へと発展することで、少女へ過大なプレッシャーを与えることとなった。

勝方＝稲福恵子は「少女の沈黙」というキーワードで米兵少女暴行事件を分析している。強姦とは自由意志を蹂躙し、語る主体を抹殺する行為である。米軍基地反対闘争の中にジェンダーという視点が取り入れられた点で、沖縄県民総決起大会は評価できるが、一方で「少女の犠牲」が闘争運動のシンボルとして掲げられる事態を招いた。これまでにも米兵による性暴力は行われてきたが、強姦されたことを世間に知られることを恐れて泣き寝入りせざる負えない状況があったのである。少女の個人的事件が、運動のシンボルとなってしまったことで少女を傷つけた可能性がある。しかし、少女は声も挙げることが出来ず、沈黙することしかできない。1955年の「由美子ちゃん事件」のように少女の被害がシンボル化される。

> 概して「少女への強姦」が文学的な象徴として使われるとき、それはとりもなおさず、「少女」に領土・国・故郷・環境・生命・純潔などの「かけがえのないもの」が込められている

としたら、「強姦」はそれらに対する取り返しのつかないダメージを意味することになる。

強姦のおぞましさは、それが恥の観念と合わさって、もはや自分自身を「かけがえのないもの」には思えなくしてしまうこと、人間としての尊厳を奪い、自身を無価値なものに感じてしまうことにある。

それらすべてを背負わされた小麦色の肌の少女は、たった一人でそれに対処しなければならない。しかも、少女の犠牲は、比類ないほど悲惨なことである。だからこそ／それなのに、「いけにえとしての少女」は、たいていの場合、象徴的な存在に奉られ悲しい物語として完結し、それ以上の分析を拒んでしまう。哀れをさそう物語りに涙を流す聞き手（読み手・観客）の想像力も、「少女の犠牲」で飛翔を終える。[1]

「少女の犠牲」は沖縄が汚されたと同等の効果を持ち、大衆運動の中でシンボル化されていったのである。しかし、「可哀相な犠牲者」のままでは何の救いにもならないのである。悲劇のヒロイン像を超えた想像力を働かせ、私たちは「少女の沈黙」の中にある幻の声を言語化していく必要性があるのである。

3. 安室奈美恵の登場と沖縄アクターズスクールの躍進

奇妙なことに、米兵少女暴行事件をきっかけに反基地運動が展開されていく時代、「オキナワの少女」[2] たちが音楽シーンで大活躍していった。少女暴行事件と同じ年の1995年１月、沖縄出身の安室奈美恵 with スーパーモンキーズの「TRY ME ～私を信じて～」が大ブレイクした。当時、安室はデビューから３年が経過していた。このヒットをきっかけに小室哲也によるプロデュースというスタイルが定着し、安室は次々とヒットを量産していった。安室は一躍、日本を代表する歌手の仲間入りを果たした。安室のように小麦色に肌を焼き、安室を意識したファッションをする女子高生が急増し、「アムラー現象」と呼ばれるほどの社会現象になった。そのことからも当時の安室の人気の高さが分かる。安室と共にスーパーモンキーズの一員だったメンバーも MAX というユニット名で、スーパーモンキーズから独立し、CD デビューを果たす。そして、安室同様、人気を集めるようになった。安室と MAX は共に沖縄にある芸能スクール「沖縄アクターズスクール」で下積みを得て、ライジングプロダクション（現・ヴィジョン・ファクトリー）からデビューした。プロデューサー主導による安室や MAX の楽曲は、当時、流行していたユーロビートを基軸としたポップスが中心で、多くの若者に受入れられ、90年代後半のヒットチャートを席巻していった。彼女たちの楽曲は当時の一般的なポップスであり、楽曲そのものに三線やウチナーグチといった沖縄的表現を使用するということはなかった。[3] しかし、彼女たちが「沖縄出身」であることは一般に知られるくらいキーワードとなっていた。

彼女たちの活躍をきっかけに沖縄アクターズスクールの練習生が、東京の芸能事務所と契約し、次々と全国デビューしていった。96年にデビューした SPEED はデビュー作からヒットを

1　勝方＝稲福恵子『おきなわ女性学事始』（新宿書房、2006 年）p191、192
2　片仮名で「オキナワ」と表記する際、本稿では表象の中の沖縄を指す。
3　安室奈美恵「Never End」（2000 年）や MAX「ニライカナイ」（2005 年）など一部例外もある。

連発し、解散ニュースは芸能ニュースで大きく取り上げられるほどだった。SPEED 以外にも男性グループの DA PUMP や、男女混成グループの Folder、知念里奈など次々と沖縄アクターズスクールの練習生が全国デビューしていき、いずれも沖縄出身アイドルとして全国に認知されるほど人気を集めた。彼らの活躍に伴い、「沖縄アクターズスクール」も全国的に認知されるほど注目された。

それまでも60年代は仲宗根美樹、70年代はアメリカ色の強さを売りにした南沙織やフィンガー５など沖縄出身のアイドルがデビューし、注目を集めることは度々あったが、沖縄アクターズスクールのように安室奈美恵に続く形で次々とデビューし、ヒットを飛ばすという潮流は今までなかった。当時、沖縄では、まだ全国市場にデビューしていないアクターズスクール練習生が出演者となり、歌やダンスを披露するアクターズスクールのレギュラー番組までも存在した。[4] こうした番組は沖縄アクターズスクール全盛期ほどの勢いはないものの番組スタイルや放送枠を変えながら現在も放送されている。[5]

4. 表象化される「オキナワの少女」

本浜秀彦は「オキナワの少女」というアイドルたち　安室奈美恵と汎アジア的身体」[6] という論文において、自らの琉球新報記者時代の取材も交えながら興味深い考察をしている。安室ら沖縄出身のアイドルたちの活躍は沖縄に住む少女たちに「私もアイドルになれるのではないか」という自意識を引きずり出したと、当時の小中高生の女の子の変化から推測している。私自身も同時代に思春期を過ごした世代として同様の変化を感じた。ルーズソックスにタンクトップといったような、前述したアクターズスクールの練習生が出演する番組に登場する子たちと同じような格好をする女の子が目につくようになり、沖縄アクターズスクールや類似するような芸能スクールに通う子は、学校でも一目置かれる存在となっていった。

本浜の分析によると、安室に続くアイドルたちの活躍によって、「オキナワの少女」というイメージは様々なメディアによって増幅され、アイドル生成のパターンを作った。そして、彼女たちは日本という身体の中の、オキナワという「身体」の差異が「市場価値」を持つことに気付いたのである。それは80年代以降形成されてきた、「リゾート」オキナワや、「長寿の島」オキナワなどといったイメージのオキナワと同じであり、「商品化」できるオキナワの発見であった。ここで「商品化」できるオキナワと、できないオキナワに分節化されたと言う。「商品化」できないオキナワとは何か。それは「政治性」である。

> 例えばある週刊誌の記者は、デビュー間もない SPEED のグラビア取材の際、九五年に起きた米兵の少女暴行事件を機に高まった反基地運動の感想を彼女たちに質問しないように所属事務所から事前に強く釘をさされたという。また、「ちゅらさん」の番組制作にあたって NHK 側は、主人公が七二年五月十五日の「本土復帰」の日に生まれた設定である

4　OTV「BOOM　BOOM」（1996 年～ 2001 年まで放送）
5　QAB「ACTORS　BACKSTAGE」（現在放送中；制作は沖縄アクターズスクール）
6　本浜秀彦「オキナワの少女」というアイドルたち　安室奈美恵と汎アジア的身体」、『アジア遊学 No. 66』（勉誠出版、2004 年）

ことと併せて、戦争や米軍基地といった政治的な問題にふれないということを事前に関係者に告げていたという。こうしたエピソードからは、「商品化」できないマイナスイメージのオキナワを排除し、それを消費者（視聴者）に忘却させようとする売り手（送り手）側の「商品戦略」が透けて見えてくる。同時にそこには、メディアの受け手である読者・視聴者の、好奇な関心と視線が、無責任にオキナワと少女に注がれるという構図も浮かび上がってくる。[7]

このようにして「オキナワの少女」というブランドが誕生したのである。奇しくも95年の少女暴行事件をきっかけに基地問題が全国的に注目される時代であった。

これまで「オキナワ」は、「少女」は、常に表象される側であった。その状況をつくりだす表象する側との力関係は今も何も変わっていない。

はたして、この絶望的な状況を変えることはできないのだろうか。

かすかな活路はある。「オキナワの少女たち」は、表象される自らの身体に気付いていると前述した。もしそうならば、彼女たちは自らの身体を意識的にかわし、表象を拒むことは可能なはずだ。あるいは表象されたことを流用して、対抗的に自らを表象することもできるかもしれない。つまりそれは、「他者」を「他者」とする者、「少女」を「少女」とする者との表象をめぐる闘いに乗り出すことである。[8]

このように本浜はこの表象の闘いに勝利できるのは「オキナワという少女たち」でしかないとまとめている。

5. 島田懇事業とマキノ校長

爆発的大衆運動に支えられた沖縄県側は、国に対し、地位協定の見直しや、基地返還アクションプログラムと、返還後の跡地を国際都市形成に充てる構想の策定を要請した。そして、復帰25年目にして初めて米軍基地問題に関して沖縄県が公式に発言できる機関「沖縄米軍基地協議会」が設置された。また在沖米軍基地の整理・統合・縮小について１年以内に結論をまとめるための機関「沖縄に関する日米特別行動委員会」（SACO）が設置され、それと引き換えに村山首相が知事の拒否した署名代行手続きを行った。しかし、一部の経済人や、「アメとムチ」の政策によって地料の引き上げにのみ関心を持つようになった一部の軍用地主からは、早急な軍用地返還に反対の声も上がるようになった。そして、96年９月８日に基地の整理縮小を問う県民投票が実施され、投票者の89％が整理縮小に賛成する結果となった。県民の支持を得て、基地問題はこのまま進展するかのようにみえたが、SACO 合意では普天間基地返還の代わりに代替施設として名護市辺野古沖に基地を建設するなど、県民投票の結果とはかけ離れた方向に展開していった。96年８月に設立された「沖縄米軍基地所在市町村に関する懇談会」（通称・島

7　同書 p46、47
8　同書 p47

田懇）は、米軍基地所在市町村に大規模な公共事業予算を投入する機関となり、これによって各市町村に新規公共事業が次々と投入されていった。その結果、基地問題は国からの補助金漬けによって、うやむやになっていたのである。

この島田懇事業が沖縄アクターズスクールの校長マキノ正幸の理念と結びつくのである。彼は98年に出版した著書[9]で次のように発言している。

> 沖縄というと、すぐ、基地問題や戦争とからめて語られる。けれども、基地に関していえば、沖縄の人間はみんな、米軍の兵士や家族と仲良く暮らしたいと思っているはずだ。米兵だって国の施策で沖縄に来ているだけで、何もけんかしなければならない理由などない。同じ人間同士仲良くすればよい。
>
> また、沖縄には日本一素晴らしい自然がある。たとえば、一部の訓練場が返還され始めた沖縄本島北部は、ヤンバルクイナ、ノグチゲラなどをはじめ、貴重な野生の動植物の宝庫だ。自然保護に目を配りながら、これらをうまく活かしていけば、北部は素晴らしい観光地に生まれかわる。沖縄全体の魅力も倍加して、ハワイやグアムにも負けない世界のリゾート地になるだろう。
>
> 人間同士の関係にしても、資源の活用法にしても、もっと明るく楽しく考えてみたらどうだろう、というのが僕の提案だ。
>
> 沖縄はこれまで、ネガティブ・キャンペーンばかりやってきた。戦後50年間これだけ苦労してきたのに報われていないと、影の部分ばかりを強調していたように思う。けれども、それはあまりに狭いものの考え方だ。世界には、もっと長い間、戦争を宿命とし続ければいけないような地域がある。きびしい言い方かもしれないけれど、沖縄だけがしいたげられているという考えは、井の中の蛙だ。とくに、いまの沖縄県のトップは発想がネガティブだと思う。ネガティブ・キャンペーンを続けているうちは、沖縄に本当の発展はないだろう。[10]

マキノは「人間同士仲良くすればよい」の発想の下、米兵犯罪を無視し、ウチナーンチュがこれまで積み重ねてきた反基地運動や沖縄戦体験記録をネガティブ・キャンペーンと称し、批判している。そして、自らのプランをポジティブ・キャンペーンと称し、いくつかを紹介している。まず、沖縄市の遊園地「子どもの国」をハリウッドやディズニーランドのようなエンターテイメントゾーンに変え、沖縄アクターズスクールのショーをすることで沖縄市をあらゆるエンターテインメントの発信地にする。金武町は町ごとテーマパークに改造し、町民と海兵隊が協力してカーニバルを繰り広げ、観光地として生まれ変わる。金武町の子ども達はいずれ金武の自然を活かしたリゾート経営を営み地域振興の要となる。彼はこれで沖縄は憧れの島となり、沖縄アクターズスクールの卒業生たちが新しい沖縄の主役になると言う。しかも、すでに計画は動き出しており、島田懇の座長をしている慶応義塾大学の島田晴雄教授や元沖縄担当補佐官の岡本行夫の協力によって具体化しつつあるとまで明言している（著書から10年以上たっ

9　マキノ正幸『才能』（講談社、1998 年）
10　同書 p187、188

た現在、実現しているものはない)。重要なのは彼がこうした発想や戦略を持って、「オキナワの少女」たちを教育し、本土展開させていったところである。

> 沖縄の子供たちはとてもいい環境のなかにいると思う。
> 「基地問題もあるし、失業率も高いのに、どこがいい環境なんだ」
> と、反論する人もいるだろう。
> けれども、いま、沖縄の子供たちは日本中から注目されている。とくにエンタテイメントの世界では、沖縄出身というだけでデビューしやすくなっている。沖縄のネガティブなイメージが変わったと言っていいだろう。
> では、イメージを変えたのは誰か。沖縄の政治家や経済人、あるいは、基地反対の市民運動家が沖縄のイメージアップに貢献しただろうか。応えはノーだ。沖縄アクターズスクールの卒業生たちが、外に飛び出して思い切り元気を発散し、基地問題や、戦争の傷跡といった負のイメージをひっくり返したのだ。
> 沖縄の子供たちが、沖縄を魅力的な島に変えた。戦後50年以上、大人の誰にもできなかったことを、子供たちがやってのけた。
> ･･･＜引用者中略＞･･･
> 戦争の傷跡も、米軍基地の問題も、確かに大きな課題だ。けれども、いつまでもそのことばかり論じていても発展はない。[11]

安室奈美恵ら沖縄アクターズスクール卒業生の活躍の裏で、戦争の傷跡や米軍基地の問題をネガティブ・キャンペーンと呼び、一掃しようとするイメージ・コントロールが働いていることを意識しなくてはいけない。自らの身体が市場価値を持つことを自覚していた「オキナワの少女」も、こうした戦略の上に立たされていることには自覚的でなかったであろう。

「少女の犠牲」によって反基地運動が盛り上がった90年代半ばに現れた沖縄アイドルの時代は、補助金漬けによって基地問題を覆い隠そうとする沖縄振興策とリンクしていたと言える。音楽業界でその役割を与えられたのが、同じ「オキナワの少女たち」だったのである。それを象徴するかのように、北部振興の一環として名護市で行われた2000年の沖縄サミットでは、歓迎レセプション（会場:那覇市）として安室奈美恵が、各国首脳を前にテーマソングの「Never End」を歌った。「Never End」では知名定男による三線を伴奏に取り入れるなど、オキナワ・イメージを強調する演出もなされた。「少女の沈黙」すら、「明るく元気なオキナワの女の子」のイメージによって、かき消されていったのである。

6. Cocco の登場

沖縄アクターズスクールが全盛を極めた時代、同じ日本の音楽市場で活躍した女性ミュージシャンとして「Cocco」がいる。Cocco は1996年に本土のインディーズ・レーベルから CD デビューを果たす。翌年にはメジャーデビューし、シングル「強く儚い者たち」がヒットし、一

11　同書 p 193、194

躍名前を知られる存在になる。彼女の楽曲に漂う独特の世界観が受けて、その後もヒットを飛ばす。インタビュー嫌いでメディア露出が少ないミュージシャンでもある。そのため、これまで沖縄音楽という文脈の中で語られることがほとんどないと言ってよい。

当時の彼女の楽曲には沖縄色を強調する部分が見受けられない。Cocco の場合、「ゴーヤー」（＝にがうり）や「クムイウタ」（＝子守唄）といったウチナーグチや単語を歌詞やタイトルに使用しながらも、前述したような「明るく元気な女の子」といった沖縄アイドルのイメージやオリエンタリズム的視点で商品化されたオキナワ・イメージとは対照的なロックを主体とした楽曲が中心である。

7. オキナワ・イメージの拒絶

彼女の音楽志向を Cocco のインタビューなどから考察してみたい。以下の引用は Cocco の活動休止に伴い出版されたインタビュー集『SWITCH SPECIAL ISSUE Cocco Forget it, let it go』[12] からである。沖縄ではミュージシャンとしての活動をしてなかった Cocco はバレリーナを夢見て上京するが、挫折する。そんなとき、音楽活動を開始した。そのため、当初、歌手という職業に思い入れはなかった。

> こっこにとってライブは快感を求める場所ではなくて、ただ、自分の“痛い”を出すだけの場所なのね。自分が立っているだけで精一杯だし、とにかく“痛い”を出せばいい、出せればいいと想っていた。（p106）

> 沖縄に生まれてきてとても幸せだと想うけど、とっても好きすぎて、たまにどうしようもなく痛い。だから内地の人みたいに『私、沖縄が好きでたまに行くの』くらいだったら良かったなって時々想う。沖縄で生きてきて、あちこちにいっぱいメランコリックメモリーズが散らばっていて、全部行きたくないと想っていたけど、一回外に出てその“痛い”を一つずつ昇華していったら、その海も行けるようになった。（p109）

沖縄でのインタビューには、次のように答えてもいる。

> こっちに帰ってきてから、何聴いてもしっくりこなくて、初めて自分のアルバム『ブーゲンビリア』を聴いた。こっこはレコーディングが終わったらもう聴かないからね。一度埋めた自分のうんこを掘りかえして眺めたりしないでしょう。何回かライブで“痛い”を“やさしい”に変えて浄化されても、まだその生々しさが消えるわけじゃないから。もっともっと歌って浄化できたら掘りかえして眺めても平気になるかもしれない。自分の歌を、痛みを伴わずに聴けたり、歌えるようになったら、こっこはもうその歌を歌う必要がなくなった時だと想う（p109）

12 『SWITCH SPECIAL ISSUE Cocco Forget it, let it go』（スイッチ・パブリッシング、2001 年）

彼女にとって歌とは苦痛を伴うものであったことが分かる。そして、その苦痛の一部は沖縄にも散らばっている。彼女にとって、その苦痛を昇華する作業が歌うことであり、それによって彼女は沖縄と向き合えるようことが読み取れる。

また彼女は自らの表現活動（音楽活動）と並行して、沖縄と向き合う中で次のような苦悩を語っている。

> 一口に『基地反対』と言うのも、普段のたわいもない話だったらいいだろうけど、それが活字になった時には誤解も生まれるし、それに責任が持てるほどの知識もない。沖縄にいてもあまりわからないのに、ましてや東京にいたら肌で感じるのとかは少なくなるさ。なんちゅうの、あっちゃんの発言で多少なりとも影響があるというのを感じていたからさ。沖縄についてでなくてもインタビューであまり深く考えずに口にしたこととかに、賛成の手紙や反感の手紙が来るさ。
>
> ・・・＜引用者中略＞・・・
>
> 基地が“イエス”か“ノー”かと訊かれても、あっちゃんはどちらとも言えないわけ。何でかって言ったら、軍用地として貸して生活している人もいるし、基地で働いている人もいるさ。基地がなかったら生まれていなかった人とか、そういう人をあっちゃんは愛したし、基地があったから出会えた人もいるから“ノー”というのはそれを否定することになる。平和がいいに決まっているけど、でも基地が沖縄からなくなるっていったら、厭だとも思う。オバアとか戦争経験者の人にしてみたら、何もわかってない今時の若者発言なんだけど、あっちゃんの沖縄の景色って基地があるからさ。金網があって、広いところがあって、たまに友達でパスカードを持っている人がいたら中に入って、大きなピザとか食べたわけ。嘉手納カーニバルに行けばアメリカ人がいっぱいいて、コザに行けばディスコにアメリカ人がいて、そういうので生まれて根付いた文化もあるさ。(p181)

一方を否定したら、一方の存在を否定してしまう矛盾に対する苦悩が読み取れる。沖縄アクターズスクールのマキノ校長の言説からは読み取れない複雑な沖縄の現実がある。また「ネガティブ･キャンペーン」を一掃することで、その現実を隠してきたオキナワ・イメージがある。Cocco は表現活動において沖縄と一定の距離を置くことで、こうしたオキナワ・イメージを意図的に、あるいは感覚的に避けてきたと考察する。本浜秀彦が沖縄アクターズスクールと「オキナワの少女」というイメージについて語っていた「自らの身体を意識的にかわし、表象を拒むこと」になる。つまり、彼女は「オキナワの少女」という表象を拒んだのではないだろうか。

8. Cocco の沖縄への接近

歌手 Cocco という自らの排泄行為によって生まれたものが、商品化されていく現実に彼女は当初、戸惑いを見せるが、プライベートの自分を「あっちゃん」、歌手である自分を「Cocco」と使い分けることによって、歌手という立場を受け入れてきた。沖縄には歌手「Cocco」はいらないとも発言している。

でもやっぱり・・・・・・自分でも、肩書きはもう歌手なんだっていうか、逃げられない、自分の立ち位置をわかったという感じもしてからに・・・・・・。あっちゃんはさ、沖縄アイラブユーだから、大好きな沖縄で大好きなバレリーナのままでいたかったし、その場所が唯一バレリーナとして帰れるところだった。

・・・＜引用者中略＞・・・

あっちゃんはここから出た人間なんだって初めて想ってさ・・・・・・。そして同時に、遠い未来、沖縄でライブをすることもあるかもしれないって想った。もう沖縄でも“バレリーナこっこ”じゃなくて“歌手 Cocco”を自分で認めなくちゃいけないんだって想った。（p145）

歌手の自分をあまりよく思わず、沖縄と距離を置いてきた彼女にも変化が訪れる。彼女は歌うことに「痛い」という感じが生じなくなり、歌うことに幸せを感じるようになったことで引退を決意した。

これまで沖縄を愛していながらも、遠ざけてきた彼女が沖縄限定で CD シングルとビデオのリリースを決意した。Cocco は地元紙の全面広告（琉球新報2001年２月１日）を使い、沖縄に対する自分の想いを直筆の文章で伝えた。沖縄に対する明らかな心境の変化である。

新聞広告１　Cocco 手記部分全文（琉球新報2001年２月１日）

愛する沖縄様。

私が沖縄に対して直接、想いを発するのは初めてです。
私はずっと沖縄を避けてきました。
Cocco という歌い手になってから沖縄を避けてきました。
「避けていた」というよりは、「近づけなかった」です。
沖縄はあまりにも強くて、そして美しく、眩しくて私の目はつぶれてしまいそうでした。
このまま目を閉じてしまおう。と
何度も想いながらいつも目を回して沖縄の空の下を歩いていました。
それでも私は目を開けたかったです。
私は逃げるように沖縄を飛び出しました。
バカみたいに沖縄が好きでした。
今　なお　想い焦がれています。
あんまりにも好きな人とは目も合わせられないのと多分、同じです。
それでもやっぱり今までに何度も沖縄に帰りました。
「Cocco」としてではなく「こっこ」として。
沖縄に「Cocco」を持ち込んではいけないと決めていました。
「沖縄人　こっこ」と「歌手　Cocco」は別だと想っていたからです。
沖縄に歌手 Cocco は必要ないと想っていました。
私の中にそういう線引きがありました。
私の沖縄に対する想いをまわりのスタッフはよく理解してくれていたので
今回のライブツアー中に私が沖縄限定の CD を出したいと言った時はみんな驚いていました。
私も驚いています。
デビューして３年かかりました。

歌手 Cocco と、沖縄人こっこの境界線がなくなるまで３年かかりました。
どちらも自分だと認められるまで３年かかりました。
そして　その３年間　毎日　沖縄を想っていました。
私はいつも沖縄を想っています。
あの光を忘れた事はないです。
あの空と海が褪せる事はなかったです。
それでも沖縄はいつも遠かったです。
だけど遠かったから私の歌は続いたのかもしれません。
届かないから、届くようにいつも祈り、想い焦がれてきたから
Cocco の歌はここまでこれたのだと想います。
私が、これから先　沖縄でライヴをする事はないと想います。
私の歌は多分、全てが「沖縄」なので　あまりにも風景と歌が重なってしまうからです。
私はきっと歌えないでしょう。
それは　それは　あまりにも眩しくて　夢のようで　美しすぎて　私は歌えないと想います。
私が雪を歌う時も　私が山を歌う時も　何をどうしても　私の心は、沖縄にあります。
沖縄に届くようにこんなに遠い場所から声をあげ手を振ります。
馬鹿みたいに沖縄を愛しています。
私には沖縄を語ることも、沖縄のために歌うことも、不可能です。
私が語るより　もっと　沖縄は深くて、　私は自分のために歌うからです。
だから　私はきっと　いつも期待には応えられません。
ただ私の心はいつも沖縄にあるということ。
確かなのは　多分それだけです。
沖縄を愛しく想い焦がれています。
どうか伝わりますように。
今回のライブツアーで「風化風葬」という曲を歌いました。
沖縄のためにつくった訳でも　沖縄について歌った訳でもありません。
私が触れるほど　沖縄は軽くありません。
ただ　いつも　沖縄を想っていました。
北海道で歌っている時も　福岡で歌っている時も　やっぱり沖縄を想いました。
沖縄の光を想っていました。
そして　私の中でやっと境界線がなくなりました。
漠然と　この歌を沖縄の空に放してやりたいと想いました。
世の中に意味のない事なんて　きっと　ひとつもないけれど
説明できるほど簡単なものばかりではないと想います。
だから具体的になにひとつ言えません。
これだけ言葉を並べても　あふれる想いをまとめられません。
なにひとつ説明できません。
ただ　私はいつも　沖縄に届くように祈り、声をあげて　ここから　手を振ります。
届かないとしても　私は　歌います。
馬鹿みたいに　沖縄を愛しています。
どうか届きますように。

愛しています。

100万回のキスを込めて私の愛する美しい島へ。
Cocco

この文章には愛していながらも、沖縄を遠ざけてきた複雑な気持ちが表現されている。沖縄をリアルに描くことは不可能なくらい沖縄は深く、自分の発言や歌が、自分の下を離れて表象されていくことに対する不安が読み取れる。だからこそ、彼女は沖縄を避け、沖縄を表現することを避けてきたのだろう。しかし、どんなに遠回りしても自分の表現の全てが「沖縄」である。良い面も悪い面も含めて「オキナワ」を背負うことに対するプレッシャーがあったのだろう。「沖縄」というものから逃れられない歌手としての Cocco を認めたことで、沖縄と自分との間にある境界をひとつ乗り越えることが出来たのではないだろうか。そして、沖縄を遠ざけながらもメッセージを送り続けていたことが文章の終盤で表現されている。「少女の沈黙」の中に何を読み取るかと同じように、Cocco が「拒絶したオキナワ」に何を読み取るかが重要であるように言える。彼女がこれまで沖縄音楽の文脈で語られてこなかったのは、そうした「オキナワ」イメージに当てはめられないためであろう。

10. 総括

今日的視座に立って、沖縄アクターズスクールと Cocco を分析してみると、そこには1995年の米兵少女暴行事件を起点とした反基地感情に対して、それら沖縄の政治的現実や戦争の記憶を、ネガティブ・キャンペーンと称し、一掃しようと試みた沖縄アクターズスクールによるイメージ戦略が見られる。一方でそうした政治的に都合のいい理想的なオキナワ・イメージの拒絶を Cocco の音楽表現から考察してみた。

事件から13年の時がたった2008年、少女暴行事件は再び繰り返された。事件後、ネットでは米兵の誘いについていった少女をバッシングする声などもあがった。事件に抗議する県民大会も予定されたが、少女は告訴を取り下げた。予定通り開催された県民大会名も「米兵による少女・婦女子への暴行事件に抗議する県民大会」から「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」へと、少女への負担に配慮した名称に変更された。

一方、1995年の少女暴行事件以降の反基地感情の高まりは沈静化して、沖縄出身のアイドルたちが次々と登場し、消費されていく流れも一時期ほどの盛り上がりはなくなった。しかし、現在においても山田優や黒木メイサなど沖縄アクターズスクール出身のタレントが活躍している。沖縄アクターズスクールは全盛期の勢いを失いつつあるが、「オキナワの少女」という表象は未だ生産され続けている。沖縄の少女をターゲットにしたオーディション番組の存在[13]など、「オキナワの少女」を使ったイメージ戦略は静かに続いている。「オキナワの少女」という商品の背景に想像力を働かせる必要性は、未だ問われ続けられていると言える。

本来であれば沖縄アクターズスクール出身者の「声」を拾い上げ、マキノ校長の言説から彼女たちを救いあげつつ、Cocco との対比において「抵抗」の諸相を描きだす必要があったかと思う。しかし、筆者の力量不足もあり、描くことが出来なかった。もし、マキノの言説が徹底して実践されているのであれば、その「声」を拾い上げることは困難な作業かもしれない。現に筆者はその「声」を今回、探し出すことは出来なかった。それは今後の課題として別稿に委ねたいと思う。

13　RBC「沖縄んアイドル」（2006 年 10 月～ 2008 年 6 月）
※さらに番組制作を行ったのが、沖縄アクターズスクール出身者を多く抱えるヴィジョンファクトリー（旧：ライジングプロダクション）である。

【参考文献・引用文献】

（書籍・雑誌）
・勝方＝稲福恵子『おきなわ女性学事始』（新宿書房、2006年）
・平良恵美子『約束　わが娘・安室奈美恵へ』（扶桑社、1998年）
・野里洋『癒しの島、沖縄の真実』（ソフトバンク・クリエイティブ、2007年）
・マキノ正幸『才能』（講談社、1998年）
・『アジア遊学 No.66』（勉誠出版、2004年）
・『SWITCH SPECIAL ISSUE Cocco Forget it, let it go』（スイッチ・パブリッシング、2001年）
・『Cocco　思い事。』（毎日新聞社、2007年）

（新聞）
・琉球新報2001年２月１日朝刊
・琉球新報2006年８月24日夕刊
・琉球新報2007年１月10日夕刊
・琉球新報2007年10月14日朝刊